サイレント・ストーム

通天閣ひぐま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サイレント・ストーム

【Ｎコード】
Ｎ６５６５Ｆ

【作者名】
通天閣ひぐま

【あらすじ】
魔力を持つ三毛猫『静寂なる暴風』が語る冒険ファンタジー。
猫と一緒に冒険。

第1話：静寂なる暴風

夜も更けた頃。

夜空には、満月が妖しい光を放っていた。バルド帝国城から少し離れた所に皇帝ラーの研究施設がある。そこは、皇帝ラーが生物を研究する為に作ったとされる施設だった。

その研究施設の一室では、一人の青年が十字の形をした板に張り付けにされていた。

まるでそれは、部屋の壁に飾られた芸術品のように見た者を「あっ」っと言わせる艶かしさがあった。見た目は、２０歳ぐらいの青年が十字の板に張り付けられた状態で意識を失っている。その十字の板には、太い金属の鎖が繋がっていて天井から吊るされて居る格好だった。

トクン・トクン・トクン

微かに弱々しく青年の鼓動があった。

青年は、衰弱していたがまだ死んでいなかった。

だが、それも時間の問題だった。

このまま吊るされた状態で何時間も放置されていれば、やがてその心臓の鼓動を停止するしかない。皇帝ラーの研究の為、青年の身体には、あちこちにメスが入れた痕あった。傷付き、衰弱し青年の仲

間や家族もそうやってその命を落していった。

ギギギィィィ

っと、この部屋の扉が開かれる音がした。誰かこの部屋に入ってきたのだ。

若い女性。

歳は、２０歳ぐらい。
綺麗な顔立ちで凛とした表情とポニーテールが似合う美しい女性だった。身体には、皇帝ラーの近衛兵の証である大鷲の紋章が刻み込まれた白銀の鎧を身に付けていた。
彼女が歩く度にガシャガシャっと鎧の金属が磨れる音がする。その彼女がスタスタと張り付けにされている青年の方へ一直線に向かった。

彼女は、青年の前まで来ると白銀の鎧の留め金を何箇所がパチンっと言う音と共に外していった。すると、ガシャンと言う音と共に白銀の鎧は、彼女の身体をすり抜けて足元に落ちたのだった。そして、腰に挿してあったナイフを取り出すと青年を拘束している皮のベルトを次々にそのナイフで切り外していった。最初に両手、両腕、首、腰、膝、足首と外し終えると、拘束が解かれた青年の身体は、力なく崩れるように前のめりに倒れようとする。そんな青年を彼女は、大事に自分の胸の中で受け止めた。

「うっ・・・」

わずかに漏れる青年の呻き声。

「大丈夫？　私の声、聞こえる？」

彼女は、そう言って自分の胸に抱いている青年に声をかけた。そして、わずかに開かれる青年の目蓋。

「お前は、・・・・誰・・・・だ？」

青年は、途切れそうな意識を繋ぎとめるように答えた。

「私は、ルーテイシア。貴方・・名前は？」

ルーテイシアがそう言うと青年は、少し考えた様子で「ラファエル・・・・」っと弱々しく答えた。

「ラファエル！　私は、貴方を助けに来たのよ！」

「・・・・」

ラファエルは、ルーテイシアの言った言葉が信じられなかった。誰も救えなかった。誰からも救われなかった。奴には、誰も敵わなかった。なのにそれが出来る事が当然であるようにこの女性は、言うのだろう。

っとラファエルの頭の中で疑問で一杯になった。

朦朧とする意識の中でただその疑問が確実に刻み込まれていった。

「これは、取引よ！　貴方を助け出す代わりに・・・貴方にやってもらいたい事がある！」

ルーテイシアが言ったその言葉を認識した時、ラファエルの意識は、

再び深い闇の中へと落ちていった。

そして、１０年の歳月が流れた。

バルド帝国城・・・それは、皇帝ラーが住む居城である。

バルド帝国城の城門から伸びるメイン・ストリートは、一直線に城下町を突き抜けて町の入り口まで続いている。そして、城を取り囲むように散乱する町の建物がこのバルド帝国の繁栄を示していた。

バルド帝国の民は、皆信じていた。この国は、不滅なのだと。この国の繁栄は、皇帝ラーがもたらしたもので、皇帝ラーが居られる限りこの繁栄は、腐り落ちたりしないと。
皇帝ラーの力は、民も認めるものであった。バルド帝国城は、その繁栄を示すように大きく広いもので、城の周りを一周するだけでも３０分は、かかる程である。

その城の西側に位置する塔。
その塔へ入るには、皇帝ラーの許可が必要だった。
塔の扉の前には、屈強な兵士が２人門番をしている。

しかし、塔の中からは、その物々しい雰囲気からは、かけ離れた笑い声が聞こえてきた。塔の中は、ほぼ円形の形の部屋になっていて、８畳ぐらいの広さがある。部屋の壁際には、小さなベッドと最低限の生活に必要な物が並べてあった。その小さなベットの脇に腰掛けた一人の少女。

歳は、１１歳ぐらい。

その後ろには、２０歳ぐらいの女性が少女の髪の毛を左手に取って、右手でくしを持って髪の毛を丁寧に梳かしていた。

「ねぇ、シャロン？　最近、城の外が騒がしいの。何かあるの？」

少女の突然と問いかけにシャロンは、少女の髪を梳かしながら、「う？ん」っと少し悩む様子で口を開いた。

「ええ、明日、明後日と・・・年に一度のお祭りがあるのです」

「お祭り？　ねぇ、シャロン！？　どんなの？」

少女は、興味津々で声を大きくして訊ねた。

「そうですね。まずラー様の演説から始まって・・・」

シャロンが一通り祭りの進行内容を話し終えると少女の目を今まで以上に輝きを増していた。シャロンは、そんな少女の瞳をみて「ハッ」っと我に返った。とても拙い事をしてしまったのではないだろうか。

っとシャロンは、後悔した。

「バルドの祭りって初めてだなぁ。見てみたい。ねぇ、シャロン！
一日ぐらい外に出れないかな？」

少女は、シャロンの方へ向き直ると上目づかいにそう言った。しか

し、シャロンは申し訳なさそうに頭を左右に振る。

「駄目です。それだけは、ラー様の許可なくは・・・・エイダ様？」

少女は、シャロンの答えを予想していたのか「やっぱり！」っと言った顔つきで何かを悩みだした。

「あのう・・・・エイダ様？」

何かを考えてるふうなエイダの姿を見てシャロンは、戸惑いながら声をかけた。

「静かにして！　今、どうにかしてラーから外出の許可をもらうか考えてるの！！」

そんな事を言うエイダにシャロンは、少し悲しそうな表情を見せた。そして、ゆっくりとエイダの小さな身体を抱きしめた。

「えっ？　ちょっと、シャロン？」

エイダを突然の事に声を上げた。

「エイダ様、きっと・・・・どんな事をなさっても。ラー様は、エイダ様が外に出る事を許可する事はないでしょう。私は、エイダ様の味方です。どんな我侭も聞いて差し上げます。でも、外出の件だけは、私には、どうにもならないのです。どうか、どうか、許してください・・・・」

シャロンは、とてもこの少女が不憫でならなかった。

まだ、遊び盛りの１１歳の少女なのに、こんな塔の中に閉じ込めら

れてきっと寂しいに違いないとそう思っていた。この少女にどんな罪があるのか、シャロンには解らなかった。
しかし、ラー様がそうなさる以上何か理由があるのだとシャロンは、そう思う事にしていた。

「ねえ、シャロン！　そんなに自分を責めないで！　私、ここに閉じ込められている理由・・・なんとなくだけど。解っているの。でもね、いつかきっとここを出て行く時が来るって信じてる。今は、無理でも・・・いつか」

「エイダ様・・・・」

シャロンは、そんなエイダの言葉が心に染込んでいた。こんな状況でも希望を失わないエイダの心がとても眩しく思えたのだ。

「祭りだよ！！　祭りが始まるよ！！　祭り！！！！　もうすぐ始まるよ！！」

一人の少年が大通りの真ん中で、張り叫びながらビラを通り行く人達に配り続けていた。

その少年の直ぐ横・・・いや、その下・・・足元を一匹の三毛猫がゆったりとした足取りで通りぬけていく。

小さな猫だった。

小さな動物だった。

されど動物。幾度となくくりかえされた天変地異を生き残り、この厳しい生存環境を生きている。

それだけで特別。人間が進化を遂げ、魔力を持ち、魔法を操ると言うのなら。

この小さな小動物にも魔力を宿さないと言う事は、ありえない。

野生の動物が魔力を持つと言う事は、どう言う事であろうか。

そう言った生き物達は、例外なく人間を襲う。

故に人間達に「魔物」と呼ばれ、恐れられ、倒される。

人間が知恵を得た為に食物連鎖の輪の中から抜け出たように、魔力を持つ動物は、その強大な力によって輪から弾き出されてしまう。

それは、鼠であっても猫であっても、熊、羊、牛、雀・・・あらゆる動物に適応される理である。

三毛猫は、ゆったりとした足取りで大通りの真ん中を怖れもせずに歩いていく。

通りの両端には、様々な露店が立ち並び、人々の密度は、奥へ奥へ行くほど高くなっていった。

大きくなる喧騒や損音にも気にした様子を見せずに三毛猫は、堂々と歩き続けた。

やがて、大通りの終りに近づき、今度は、三毛猫の前に大きな城の

城門が見えてきた。

しかし、三毛猫は、歩むのを止めなかった。

そのまま、城門を抜けて、中庭へと進んでいく。

中庭へ進んだ三毛猫は、地下へと続く階段を見つけてようやくその歩みを止めたのだ。

しばらく、じっと地下への入り口を眺めたかと思うと、三毛猫は、再びあのゆったりとした歩みを始め、地下へ続く階段を躊躇さえ見せずにそのまま身を中へとすべり込ませた。

湿り気のある空気。

かび臭い匂いと、肉が腐ったような腐敗臭。

三毛猫が飛び込んだ城の地下は、そんな空気に包まれていた。しばらく、歩みを続けていた三毛猫だったが、地下の奥から聞こえてくる声に歩みを止めて、ピクリと声がする方へ両耳を向けた。聞こえてきたのは、女性のそれも少女のすすり泣くような声だった。

そして、三毛猫は、その声が聞こえる方へと歩みはじめた。

一人の少女が泣いていた。

鉄格子がはめられた薄汚い牢屋の中で啜り泣いていたのだ。服に

も泥がつき、手足も汚れ、顔も髪の毛も汚く汚れていた。

何が悲しいのか、少女は、泣き続けた。いや、三毛猫には、わかっていた。少女が悲しんでいるのは、寂しいからだと。こんな薄暗く、汚い誰もが寄り付かない地下の牢屋の中で一人存在する事が悲しい事なのだと。

「ねぇ、君。どうしたの？　どうして、こんな所に居るの？」

突然の声。

他人の気配さえ無かった空間に突然涌いたような声に少女は、驚いて泣くのを止めてしまった。

そして、周りを見渡して、声の主を探した。

少女は、さらなる驚きを隠せないでいた。

目の前に存在する三毛猫を見つめ、恐る恐る声を掛けた。

「猫さん？　さっきの声は、・・・・猫さん？」

「そうだよ。僕は、魔物。だから、人の言葉を喋れるのさ」

少女は、「魔物」と言う言葉を聞いて、とっさに身構えた。

「あっ、そんなに怖がらなくていいよ。何もしないから。でも・・・そりゃ、驚くよね。魔物は、人に声を掛けるなんて、めったにしないから」

「じゃあ、どうして・・・」

少女は、少し怯えた様子で目の前に存在している三毛猫を凝視した。

「人間である君は、魔物である僕に魅入られた・・・っと。そう言う事にしておいてくれないかな」

「・・・・・」

「とりあえずさ。自己紹介しよう。僕の名前は、『静寂なる暴風』。君の名前は？」

「・・・・クリス」

少女が弱々しく答えると、三毛猫は、ニッコリと微笑んだ。

「僕は、君の味方だよ。ねえ、こんな薄暗い気持ち悪い所・・・早く出よう」

「無理・・・・。ここは、牢屋だから・・・閉じ込められているの。魔力も魔法も封じられて・・・何もできなかった」

「ふふん、君は何か忘れてないかい？　僕は、魔物だよ。魔物と言う事は、力を持っているんだ」

三毛猫は、自慢げに胸を張って、鼻息を荒くした。

それを見たクリスは、二度、三度瞬きして

「・・・力？」

と、三毛猫に聞き返した。

「そう、力。人間は、知らない。獣だけが知る。獣の魔法。人の作り出した魔法の法則に縛られない特別な魔法だよ」

「ここから、出られるの？」

少女が不思議そうに聞くと、三毛猫は、パッっと顔を輝かせた。

「そうだよ。自由になれるんだ。自由って良いよね。だから、君がここから出たいと願うなら力を貸すよ」

「ねえ、お願い。私をここから出して」

少女の声は、とても弱弱しいものであったが三毛猫の耳には、ハッキリとそう聞こえた。

「うん、解った。じゃあ、行こう。ここから出よう。この薄暗い絶望が渦巻く世界から決別するんだ」

三毛猫は、そう宣言した。

この少女をこの穴蔵から連れ出す事に三毛猫は、喜びを感じていた。

これは、きっと何が始まるきっかけなのだと。そう思うと嬉しくて、両目をランランと輝かせる三毛猫・・・・静寂なる暴風であった。

第2話：復讐の青年

バルド帝国城から少し離れた広場に大きな櫓(やぐら)が建てられていた。

櫓の周りに集まった国民達は、数千人にもおよぶ規模でその視線は、櫓の中へと注がれている。

祭りの開始を告げる皇帝ラーの登場を誰もが待ちわびていた。

そんな国民達とうって変わって、近くの時計台の上から、見下ろす一人の青年の姿。

その時計台は、建てられた櫓よりも高く、櫓を見下ろす格好でその青年は、鋭い視線を向けていた。

この青年の名は、ラファエルと言う。

そう、数年前……ラーの研究所から助け出された、あの時の青年である。

背には、大剣を背負い、左手に弓を右手に矢を握り締めて、ラファエルは、櫓を凝視する。

国民の声援の中、ついに皇帝ラーが櫓に現れた。

歳が判らないように白金の仮面を被り、国民の誰もが着るような質素なローブを纏った姿で現れたのだ。

一層強まる声援であったが、皇帝ラーの一言で静まり返る。

「我が国民達よ！！」

その一言で、広場は、静まり返り、国民達は、皇帝ラーの次の言葉を待つ。

「我が国民達よ。我が国は、隣国ブルームと戦争状態に突入した。長く苦しい日々は、続くだろうが。もう少しの我慢である。我が国の勝利は、約束されている。世界は、我に統治されてこそ、永遠の平和が訪れるだろう」

その皇帝ラーの言葉に誰もが熱狂的な声援を上げる。

国民の誰もが皇帝ラーを尊敬していた。そして、決して国民を裏切らない事を知っている。この偉大な皇帝が世界を導くに相応しいと誰もがそう思っていた。

時計台の上で皇帝ラーの演説を聞いていたラファエルは、怒りで心が溶けてしまいそうだった。

何が戦争だ。何が勝利だ。何が永遠の平和だ。

そんな偽りの仮面を被り、国民を操っている皇帝ラーと言う存在がラファエルには、許せなかった。

ハイ・エルフの一族や家族を研究や実験の為と言って、捕まえ虐殺

してきた事実を目のあたりにしてきたラファエルには、皇帝ラーの言葉がどれも詭弁に映る。

ラファエルは、深い深呼吸をすると、左手に持った弓を構えた。右手に持った一本の矢を弓に添えて、ラファエルは、狙いを定める。もちろん、ラファエルの狙いは、櫓の上で演説を続けている皇帝ラーである。

ラファエルの居る時計台から、皇帝ラーの居る櫓までの距離を考えれば、正確に矢で射抜く事は、不可能に近い。

だがラファエルが手に入れた一本の矢は、魔法が掛かった特別製である。矢の着弾点から、半径１０メートルの範囲を消滅させる戦術兵器並みの威力を持っている。

その強力すぎる威力の為に矢を生成する為には、多大な時間と労力が必要だった。その為、ラファエルが手に入れる事が出来たのは、この一本だけである。

ラファエルは、慎重に狙いを定め弓を引き、矢を放った。

放たれた矢は、一直線に皇帝ラーの許へ飛び、ラーの顔の直ぐ横を通り抜けようとした。しかし、矢は、皇帝ラーの顔の右横でその進行を止めてしまった。

「なにぃぃぃ！！」

それを見ていたラファエルは、驚愕の声をあげた。

皇帝ラーは、自分に向かってきた矢を無意識に右手で掴み取っていたのである。

だが、ラファエルが驚いたのは、そこではなく矢の消滅魔法が発動しなかった事だった。

「ちっ、発動しない？　あのオヤジ、不良品を掴ませやがって」

ラファエルがそう愚痴ってる間もなく、国民達の間に動揺が広がった。

飛んで来た矢を見て、皇帝ラーの命を狙う賊が居ると、国民達が騒ぎ始める。

「あそこだ！！　時計台の上に人が居るぞ！！！」

一人の男が時計台を指差した。

次々に人が振り向き、ラファエルの姿を凝視する。

ラファエルは、直ぐに時計台の上から、近くの扉を開けて中へとその身を滑り込ませた。

そして、螺旋構造になっている時計台内部の階段を素早く降りていく。

一階へたどり着いて、ラファエルは、外へと出る為の扉が勢いよく開いた。

開いた扉から、外の様子を伺ったラファエルは、目を細めて、奥歯を強くかみ締める。

「やっぱり、こうなるわな」

時計台の外には、屈強な帝国兵が数百人の規模で、待伏せをしていたのだ。

ラファエルは、背に背負った大剣を構えると、ゆっくりとした足取りで、外へと歩きだす。

矢を自分に向けられた皇帝ラーは、自身で掴み取った矢を控えていた一人の兵士に渡すと、櫓の下で数百人の兵士を相手にして戦っている青年の姿を眺め見た。

「ふむ、強いなあの青年は。我が帝国の兵が赤子のようではないか」

皇帝ラーは、ラファエルの奮闘ぶりに興味を示していた。それもそのはず、ラファエルが大剣を振るたびに兵士達が3、４人吹き飛んでいたからだ。通常の人間では、ありえない動きと力を見せ付けていた。

皇帝ラーの直ぐ後ろに控えていた一人の老人が進み出て、ラファエルの姿を覗き見る。

「ですが、陛下。人の身なれば、この多勢に体力が持ちますまい。まして、この櫓まで届かぬかと。ですが万が一の事もございます。今の内に城の中へ避難を」

老人のその言葉に皇帝ラーは、「うむ」と、頷くと、櫓を去ろうとする。

その皇帝ラーの姿を激しい戦いのなかで見ていたラファエルは、「チッ」と、舌打ちする。

届かない。今一歩、届かない所に居る皇帝ラーにラファエルは、焦りを感じ始めて居た。

「くそっ！　ラーを倒す体力は、残しておきたかったんだがな。そうも、言ってられないか」

ラファエルは、大剣の動きを止めると、目を閉じる。

そして、大きく息を吸い込むと、吐き出すタイミングで大剣を地面に叩き付けた。

石畳の地面に亀裂が入り、舞い上がる砂埃。

ラファエルは、動揺する兵士達の隙をついて、走りだした。

ラファエルが目指すのは、櫓の上に居る皇帝ラー。
邪魔をする者は、切り伏せ、突き飛ばし、ラファエルは、櫓をくみ上げてる木の骨組みに取り付き駆け上がった。
そう、瞬く間に皇帝ラーの目の前にラファエルは、現れたのである。
「ほう、よくこの場所までたどり着けたな？」
皇帝ラーは、感心した様子で目の前に居るラファエルに向き直った。
だが、ラファエルは、宿敵皇帝ラーが目の前に居るのにもかかわらず、その場で膝をつき、荒い呼吸を繰り返している。
「ふむ、返答する体力もないか」
皇帝ラーは、疲れきったラファエルの姿を見て、そう言うと、ラファエルは、ふらつく身体を堪えながら、大剣を構えた。
大剣を構えたラファエルを見て、皇帝ラーは、近くの兵士から、ショートソードを借りると「控えよ」と、命令する。
「この場所まで、来た褒美に我が相手をしてやろう」
皇帝ラーは、冷静にショートソードを左手に持ち、半身の状態で構える。
「クッ……。一族の仇」
ラファエルは、小さな声でわずかに呟いた。

「だが、戦略ミスだな。お前は、最初の一撃をミスした時点で、体力を温存しつつ、一度撤退するべきであった」

皇帝ラーがそう言って、間もなくラファエルは、奇声を発して切りかかった。

皇帝ラーは、頭上から落ちてくる様な大剣の軌道を軽やかにかわすと、一歩前に進み出る。がら空きになったラファエルの後頭部目掛けて、皇帝ラーは、ショートソードの柄を叩きつけた。

「ぐわっ！！」

ラファエルは、その場に崩れ落ち、気を失ってしまった。

「お前にもしも。仲間が居たなら……いや、やめておこう」

皇帝ラーは、ショートソードを兵士に返すと、気を失ったラファエルを牢屋に閉じ込めるように指示を出した。

兵士達がラファエルの身体を持ち上げた所で皇帝ラーは、口を開いた。

「殺すなよ。その男に聞きたい事がある」

そんな事を言われて、兵士達は、敬礼した後で、お互いを顔を見合わせた。

第3話：魔物と人と

バルド帝国城。

４階建ての城であるが、その内部は、広く複雑でまるで迷路の様になっている。敵の侵入を許した場合、敵を迷わせる為の工夫である。

例え、城内に仕える人であっても、城の地図が頭に入ってないと迷ってしまうほどであった。

そんな城の中をうろつく二匹の子猫。

一匹は、三色の体毛を持つ猫、「静寂なる暴風」であった。

そして、その後ろをついて行くのは、白銀の体毛を持つ子猫。

この白い子猫は、静寂なる暴風の獣の魔法によって姿を変えてしまった少女、クリスその人物であった。

魔法結界により、封じられていた地下牢から脱出する為に人では無い姿に変化させるしかなかったのである。人間を封じると言う括りで張られた魔法結界を騙すためにクリスは、その身を白い子猫の姿に変えて居た。

地下牢を脱出して、いざ城の外へと向かう予定だった二匹の子猫

は、複雑な城の作りに迷子になってしまい城の中を彷徨っていた。
そんな二匹の子猫の姿を巡回していた2人の兵士が見つけて声を上げる。
「おい。猫が二匹迷子になってるぜ。どこからか、迷い込んだようだな」
「どうするんだ？」
「どうするって？　捕まえるしかないんじゃないか」
兵士達が子猫の処遇について、あれこれ相談していると、もう一人、今度は、煌びやかなハーフアーマーに身を包んだ青年が通りかかった。
その姿を見た二人の兵士は、直立のまま敬礼をする。
「どうかしたのか？」
「ハイ、カレット様。子猫が二匹迷い込んだようでして」
カレットと呼ばれた青年は、何かに閃いた様子でクスリと笑みを浮かべる。
この青年、名をロディー・カレットと言った。名のある貴族の出で、皇帝ラー直属の近衛兵第一軍の部隊長をしている。もちろん、城の中では、知らない者は、居ないほど名の通った人物である。
「いい事を思いついたんだ。一緒に子猫を捕まえよう。それと、大

きめの鳥かごが欲しいな」

ロディーがそう言うと兵士の一人が一度敬礼をして、鳥かごを探しに走り去った。

城の西側に位置する塔。

そこに二匹の子猫が入った大きめの鳥かごを持って、ロディーは、入り口の前で立っている。

そして、入り口の前に立つ二人の屈強な門番に止められていた。

「カレット様、またですか」

「そこをなんとかならないか」

「あまり、許可なく人を入れるなと言われて居るんですがね」

「そんなに固い事、言うなよ。今日は、プレゼントを持って来たんだ」

ロディーにそう言われて、門番達は、少し呆れた様子で入る事を許したのであった。

エイダは、突然の意外な人物の訪問に驚き、喜びの声を上げた。

「うわぁ～っ。ロイ、久しぶりだよね。ねえ、早くこっちに来て」

エイダは、ベットの端に腰掛けたまま、隣へ腰掛けるように促す。

「元気にしてかい？　お姫様。これは、プレゼントだよ」

ロディーは、そう言って、二匹の子猫が入った鳥かごをエイダに手渡した。

「わーっ、可愛い子猫が二匹も」

エイダは、鳥かごに入った二匹の可愛い子猫を見て、嬉しそうに声を上げる。

そんな嬉しそうなエイダの姿を見て、ロディーは、微笑んだ。

静寂なる暴風は、城の中で迷子になって居た所をロディーに捕まえられた。

実のところ、静寂なる暴風は、大人しく捕まれば、城の外へと連れて行ってくれるではないかと、そう考えていたのである。

しかし、連れて来られた所は、城の外ではなく、西に在る塔の中。

静寂なる暴風は、鳥かこの中で塔の中に入った時に違和感を感じていた。

「これは、まずいかもしれないね」
小さな声で、隣に居る白い子猫クリスに静寂なる暴風は、話しかける。
「まずいの？」
「この塔の中は、魔法結界が張られている。それも相当強力で、特殊なやつだよ」
静寂なる暴風は、塔の異質さを敏感に感じとっていた。
そして、静寂なる暴風の魔力に塔の魔法結界が反応して、弾ける様な感覚と共に魔法結界の一部が壊れてしまったのを感じた。

ロディー達が部屋の中で会話を楽しんでいると、唐突に部屋の入り口が開かれた。
入り口から入って来た人物の姿を見て、ロディーとエイダは、直ぐさま床へと跪づく。
そう、部屋に入って来たのは、皇帝ラーその人だったのである。皇帝ラーは、部屋に入るとロディーの姿を見つけて、声を掛けた。
「ロイ、どうしてお前がここに居る？」

「姫様の話相手でもと思いまして……」

「まあ、いいだろう。我は、少し気になる事あってな。この部屋にやって来たのだが……」

皇帝ラーは、そう言って、ロディーの隣で跪づいているエイダを睨みつける。

エイダは、そんな皇帝ラーの視線に怯みもせずに顔を上げた。そして、ゆっくりと皇帝ラーの許へと歩きだす。

「陛下、お久しぶりでございます。少しお話を」

エイダは、少し緊張した面持ちで、皇帝ラーの傍に辿り着いた。

すると、返ってきたのは、言葉ではなく、皇帝ラーの右手だった。

「我に近づくな！！」

大きく振りかぶった皇帝ラーの右手は、エイダの左頬を捉え、その衝撃で吹き飛び、床を転がり、狭い部屋の壁のその小さな身体をぶつけたのである。

それを見て居たロディーは、直ぐに抗議の声を上げた。

「陛下！！　それは、あまりにも……」

「ロイ！　お前は、黙っていろ」

ロディーは、皇帝ラーにそう言われて黙るしかなかった。

左頬を殴られ、吹き飛ばされたエイダは、ゆっくりと立ち上がると、晴れた頬を押さえながら、キッっと皇帝ラーを睨みつけた。

「お前の望みも、希望も。我は、理解している。だが、お前の望みは、一切叶わぬと知れ！！　お前は、この部屋から一生出る事は、出来ない。お前は、この部屋で育ち、成長し、老いてその命が尽きるまでここで過ごすのだ」

「……」

エイダは、もはや皇帝ラーを睨み付けるだけで何も語らなかった。

「お前をこの境遇に追いやったのは、我である。我を憎め。それで、お前の気が晴れるのならな」

皇帝ラーは、そう言い終わると、今度は、部屋の中を見渡しはじめる。

そして、部屋の中心へとその身を進ませた。

「ふむ。魔法結界の一部が欠損しているな。エイダ、お前のしわざか？」

「……」

「ふん、これから、魔法結界の修復に入る。ロイ、お前は、少し下がっていろ」

何も答えないエイダを横目で見ながら皇帝ラーは、両目を瞑って呪文を唱え始めるのだった。

皇帝ラーは、魔法結界を修復し終わると、ロディーの方へ向き直った。

「ロイ、お前に少し話しがある。我について来い」

皇帝ラーは、一方的にそう言うと部屋を出て行こうとする。

ロディーは、直ぐに皇帝ラーの後を追ってエイダ居る部屋を出て行った。

塔を後にして、ロディーは、皇帝ラーの横に並び声を掛ける。

「陛下、お話とは？」

「あの娘の事だ。お前は、どう思っている？」

「……言いにくい事ですが。不憫であると。あのような所に閉じ込めてられて」

「うむ。お前らしい答えだ」

皇帝ラーは、少しからかう様に言うと笑みを浮かべた。

「だがな、ロイ。あの娘にあまり情を移すなよ。出なければ、後で苦しむ事になりかねぬ」

「それは、どう言う事ですか？」

「このさいだ。お前だけには、教えておこう。強すぎる魔力と言うものはな。人や生物を変質させてしまうのだよ。小さな小鳥や鼠、猫さえも魔力を持ては、変質し魔物になって人間を襲うようになる」

「それは……」

「あの娘は、生まれつき強い魔力を持って居たのだよ。いや、とても強力な魔力をな。故に変質を始める前に魔法結界の中に閉じ込めた」

「……」

ロディーは、皇帝ラーから告げられた事実に言葉も出なかった。そして、エイダが部屋に閉じ込められている理由を知っても、やはり不憫であるとそう思った。

「あの娘を決して、魔法結界の外に出しては、ならぬ。外に出せば、その自身の魔力に押しつぶされて変質を始めてしまう。見たくないものだな。人間の魔物化を。魔人と呼ばれる存在をな」

「御意」

「ロイ。もしも、あの娘が魔法結界の外に出る事があったのならば、お前が倒してやるのだな。せめてもの慰めとしてな」

ロディーは、皇帝ラーにそう言われて、自分自身に自答していた。

倒せるのかと。自分がまだ少女のであるエイダの命を絶つ事ができるのかと。例え、人でなくなったとしてもエイダを倒す自信が今のロディーには、持てなかった。

そして、皇帝ラーの優しさに感謝をする。

亜人種であるエルフやドワーフには、冷徹な皇帝ラーであるが、人間や身内には、とても優しい面を見せる。その事は、誰もが知ってる事で、だからこそ民も兵も皇帝ラーに対する信頼は、厚かった。

ロディーは、思うである。これほど人の上に立つに相応しい人物は、居ないと。世界を統一し、平和な世界を構築できるのは、陛下以外に居ないと。

第４話；クリスと言う名の少女

バルド帝国城の地下にある牢屋で、鞭が叩きつかられる音が響きわたって居た。その牢屋には、太い鉄の鎖で両手両足を壁に縛り付けられた格好でラファエルが捕らえられて居る。

そんな姿のラファエルに一人の体格の良い兵士が鞭を叩きつけていたのだ。

「いいかげん。吐かないか。どこの国の間者なんだ？　陛下の命を狙うなど」

兵士は、痺れを切らした様子でそう言った。

だがラファエルは、うなだれたままで何も答えようとしない。

兵士は、皇帝ラーに『殺すな』と命令されていた手前、あまり強硬な手段の出られない事への苛立ちを募らせていた。

「知っているか？」

今まで沈黙も守っていたラファエルがいきなりそう呟いた。

突然の事に兵士は、驚いて大きく両目を見開く。

「なんだ、いきなり」

「知っているか？　精霊魔法って言うのはな。精霊の声を聞き、自身の魔力を餌にして魔法を使ってもらう事を言うんだ」

「いったい、何の話をしている？」

「あにくに俺は、昔、皇帝ラーの身体中を弄り回されたおかげで、精霊の声が聞こえなくなってしまってな。だから、考えたのさ。自分自身の内に眠る魔力の活用法をさ。エルフは、純粋な魔法は使えない。人間とは、構造が違うらしくてな。最初は、上手く行かなくて苦労したがね。身体に眠る魔力を全身に巡らせる事に成功したんだよ」

「いいかげん、だまらないか！！」

兵士は、いいかげんウンザリした様子で叫んだがラファエルは、かまわず言葉を続ける。

「そうだ、魔力を全身に巡らせるんだよ。細胞一つ一つに染み渡るようにな。そうするとな……こんな事が出来るんだよ！！」

ラファエルは、そう言って、少し力んで見せた。

すると、ラファエルの身体を拘束していた太い鉄の鎖がまるで粘土の様に引き千切られたのだ。

兵士が驚いて、声を上げる間の無く、ラファエルは、自由になったその身を素早く前進させて、兵士の顔面を右拳で殴りつけた。

小さな悲鳴を上げて、兵士は、その場に崩れ落ちるとそのまま気を失ってしまったのである。

「この力の唯一の欠点は、体力の消耗が激しいと言う事だな」

ラファエルは、そう呟きながら、気を失った兵士の腰から、ショートソードを奪い、牢屋の鍵の束を服の中から引きずり出した。

「さてと、随分時間が過ぎた。早く見つけ出さないとな」

ラファエルは、鍵を開けて、ショートソードを右手に牢屋の外へと飛び出して行くのだった。

塔の中で静寂なる暴風は、思い悩んで居た。

クリスを連れて、城の外へ脱出を試みたものの結果的に塔の部屋に閉じ込めらてしまった事に悩んでいたのだ。

「クリス、この部屋の魔法結界のおかげで、簡単に脱出できなくなったね。僕の魔力でも無理そうだ」

「……もう、諦めるしか」

「大丈夫だよ、僕が外の世界へ連れ出すって契約だからね。必ず、外へ連れて行くよ。ただ、その方法が簡単では無くなっただけだよ」

「でも。どうしたら」

「さっき、男が魔法結界を修復した時に僕の術式を割り込ませたんだ。でも、今のままだと術式を発動しても魔法結界は、完全に壊せない。もっと、魔法結界に負荷をかけないとね。僕とクリスの魔力では、魔法結界のリミットギリギリなんだ。せめてもう一人分の魔

力圧力があれば……」

静寂なる暴風は、心配するクリスを落ち着かせる為にそう説明したが実際に現状では、なすすべが無い事を解かって居た。

ただ、静寂なる暴風達が出来るのは、脱出するチャンスが来る事を待つのみである。

バルド帝国城内では、慌しく兵士達が走り回って居た。

「脱走だ。賊が地下牢から逃げたぞ！！」

兵士の一人がそう叫んで周りに注意を促す。

そして、その情報は、城内全てに行き渡り、城に居る兵士達が一斉に動き出した。

ラファエルは、ショート・ソードを片手に城内で押し寄せて来る兵士達相手に激闘を繰り返しながら、移動をして居る所だった。

「オイオイ。どんだけ兵が居るんだよ。それにしても俺一人の為に総動員かよ」

ラファエルは、切れ間なく押し寄せてくる兵士達を見て、ため息混じりにそう呟く。

そして、とうとうラファエルは、城の西側に位置する塔へと追い詰

められてしまった。

塔の扉を背にして、ラファエルは、ショート・ソードを構える。

「一寸、まずいな。このままだとまた捕まるか。体力もこれ以上こころもとないしな」

ラファエルは、ゆっくりと迫り来る兵士達を睨みながら、背にある扉のドアノブに手を掛けた。

すると、カチッと、言う音と共にに扉が少し開く。

「ふっ、鍵が掛かってない？　篭城して、体力の回復を待つか？　このままじゃジリ貧だしな。しかし、どちらにしても逃げ場が無い。時間が稼げるだろうが」

ラファエルがそう思案を始める間のなく、睨み合いの痺れを切らした兵士の一人が斬りかかって来た。

すぐさま、ラファエルは、身を翻して飛び込んで来た兵士を蹴り飛ばすと、その勢いのまま塔の中へとその身を滑り込ませた。

塔の前で兵士達が中に飛び込んだラファエルが出てくるのを待っていると、部隊長であるロディーがやって来た。

「どうした？　何をしている？」

「それが、地下牢から逃げ出した賊がこの塔の中に逃げ込みまして」
兵士の一人がそう説明するとロディーは、少し考え込むと兵士達に命令を下した。
「ふむ、放って置いてもいいだろう。もう良い。お前たちは、下がれ」
「しかし……」
兵士達は、ロディーの命令が納得がいかない様子で声を上げた。
「あの賊は、普通の地下牢では、意味がなさそうだ。もっと、特別製の牢屋を用意するまで時間稼ぎなる」
「ですがあの塔の中には」
「何も出来んよ。あの塔の中には、強力な魔法結界が張ってある。魔力を持たない人間には、無害だがね。魔力を持つ者にとっては、蟻地獄の様な所さ」
ロディーのその言葉に兵士達は、これ以上意見出来なかった。
自ら罠へと入り込んで行ったラファエルを暫く放置する事しかできない事への蟠りが兵士達に在った事は、ロディーも理解していたが現状出来る事は、それしか無い事も解かっていた。
ただ一人の賊と言うには、とても強い戦闘力を持って居る。
下手に手を出して、こちらの被害が増える事は、ロディーも本意で

は、なかったのである。

ラファエルは、塔の中に入ると急激な疲労感に襲われその場に崩れ落ちてしまった。

「なんだ、ここは？　この部屋は……力が急に入らなく」

突然の侵入者にエイダは、驚いて崩れ落ちたラファエルの方へ駆け寄った。

「誰？　貴方は？」

そう問いかけたエイダをうつ伏せに倒れたラファエルは、目だけを動かして、エイダの姿を見据える。

「この部屋は、そうか。魔法結界か。お前は、平気なのか？」

「慣れているから」

「まるで、強制的に身体中の魔力が吸い出されていくようだ。これを慣れているか。そうとうな魔力の持ち主なのか？」

「解からない。物心ついた時から、ここに居るから」

エイダは、少し心配そうにラファエルの手を握る。
すると、ラファエルは、無理やり身体を起こして溜息を吐く。
「大丈夫だ。俺も少し慣れてきたよ」
「貴方は、誰なの？」
エイダは、再びラファエルにそう問い、ラファエルは、少しおかしそうに笑みを浮かべた。
「ああ、そうだな。まず名を名乗るか。俺は、ラファエル。お前の名前は？」
「エイダ」
ラファエルは、エイダの名を聞いて、少し驚いた様子で考え込んだ。
「違うのか、この子がそうだと思ったのだがな」
「いったい何を？」
「お前、クリスと言う名の少女を知らないか？」
ラファエルの口から出た『クリス』と言う名前を聞いて、エイダは、ピクリとその身を震わせた。
そして、キュっと唇をかみ締める。
「それは、私の事です。私の名は、エイデリア・クリスティーン。

それは、私のミドルネーム」

「そうなのか？　なら、お前事に間違いないだろう」

ラファエルは、ようやく目的の少女を見つけ出せた事に安堵の溜息を吐いた。

ラファエルは、ある人物の依頼を受けて、城の中で幽閉されている『クリス』と言う名の少女を救出する事が目的だったのである。

「ある人物の依頼でな。お前をこの城から助け出しに来たんだよ」

ラファエルがそう言うとエイダは、嬉しそうに笑顔を向けた。

エイダは、もう一人の『クリス』の存在を理解して居たがそれをラファエルに告げる事は、しなかった。

それよりも自分自身が自由になれるチャンスがやって来た事に嬉しさを隠しきれなかったのである。

第5話：二人の少女

クリスは、不思議でならなかった。目の前に居る少女、エイダが発した言葉が信じられなかったのだ。青年は、「クリス」と言う名前の少女をこの城から助け出しに来たと告げた。なのにエイダは、それは、自分の事だと言ったのである。

クリスは、自分を助け出しに来た青年に名乗る事も許されない状況で、「クリス」と名を偽ったエイダを信じられない気持ちで眺めて居る。

皇帝ラーによって幽閉されていた。

それは、自分もエイダも同じ境遇だった。

それ故にエイダの「ここから出たい」と言う気持ちがクリスには、よく解かっていた。だからこそのエイダの嘘がクリスの心に突き刺さる。

クリスは、とある国の城下町にある小さなパン屋の娘として、育てられた。

と、言ってもパン屋の主人との血の繋がりは、無く。赤ん坊の頃、養子としてパン屋の主人に引き取られたのである。クリスは、常日頃からその事を父と仰ぐパン屋の主人にその事を教え込まれていた。

自分は、王族に連なる高貴な血脈を持つ存在だと言う事。そして、

自分には、双子の姉が存在する事。

もしも、その姉が成人し、王位を継げば、自分は、姉の為にその身を捧げなければならない事。

そう言った事も含めて、教えられながらクリスは、大切にパン屋の娘として育てられた。

だが、ある日の事。

クリスは、店の手伝いで、帰りが遅くなり、日が落ちて薄暗くなった夜道を歩いていると、突然あらわれた男達数人に襲われてしまった。気が付けば、城の地下牢に閉じ込められていたのである。

「クリス、ねえ、聞いてる？　クリス？」

静寂なる暴風の言葉に我に返ったクリスは、気持ちを切り替えて彼の正面に向き直った。

「クリス、状況が変わった。あの男が部屋に入り込んだおかけで、十分な魔力負荷を結界に発生させている。今がチャンスなんだ」

「結界が破れるの？」

「そうそう、だから始めよう」

静寂なる暴風のその言葉にクリスは、覚悟を決めた様子で、その白い小さな身体をエイダと青年の前に進ませるのだった。

突然の事にラファエルは、少し驚いたが直ぐに何処にでも居そうな子猫だと判断した。自分の目の前に居る小さな子猫が二匹、突然目の前に飛び出してきたのだ。

「子猫……ここで飼われているのか」

ラファエルは、安堵の溜息を吐いたが、その次の瞬間に飛び込んで来た初めて聞く声に自分の耳を疑った。

「お願い！　私の話を聞いて」

そんなクリスの叫びにラファエルは、声の主を探すように部屋の中を見渡す。だが、見つからない声の主にラファエルは、エイダの方へ顔をむけるが彼女も顔を左右に振る。

「いったい。何処から……」

ラファエルが困惑していると、再び声が聞こえてきた。

「私は、ここです」

ラファエルは、今度こそ声が聞こえて来た方向を確実に捉えた。

ラファエルが顔を向けた先には、一匹の子猫の姿。ラファエル自身信じられなかったが、確かにこの子猫が言葉を発したのだと奥歯を

噛み締めた。

「どういう事だ。子猫が人の言葉を喋る？　魔物だと言うのか」

「魔物じゃないの。こんな姿をしているけど。元は、人間」

ラファエルは、状況が飲み込めないまま、クリスの話を聞いて居たがしだいに心を落ち着かせ聞き入るようなになっていった。クリスの説明により、ラファエルは、彼女達も自分と同じこの城からの脱出が目的である事を知る。

「僕は、彼女と違って、魔物だよ。ああ、そんなに身構えないでよ。僕は、君達に危害を加えるつもりは、ないよ。僕は、彼女と取引をしたんだ」

白い子猫の後ろから現れた、もう一匹の三毛猫の姿を見て、ラファエルは、少し警戒したが三毛猫の言葉に安堵の溜息をついた。

「つまり、お前達もこの城から出たいから、協力しろと？」

「そう。僕達は、この部屋の結界破壊する手段がある。協力してくれたら、脱出できると思うよ」

三毛猫のその言葉にラファエルは、少し考え込んだ。今のラファエル達の現状を考えれば、三毛猫の提案は、とても魅力的である。しかし、人間の言葉を喋る子猫が二匹、しかも一匹は、魔物だと言う。どこまで信用できるのか、ラファエルは、少し慎重になった。

それでも現状を打開する手段がそれしかないと言う事も理解していた。

「わかった。協力しよう。ただし、この部屋の結界を破壊するまでだ。その後の事は……」

「ああ、解かっているよ。さあ、始めようか」

三毛猫は、ニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6565f/

サイレント・ストーム

2012年1月4日13時51分発行